AFC Forum フォーラム

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

4

2016

特集 農水産物輸出成功の視線

AFC フォーラム Forum 4
Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers 2016

撮影：富田 文雄
三重県津市美杉町
2015年4月15日撮影

棚田と三多気の桜

■田植えに向けて水が張られた棚田は、桜の美しさを映す、つかの間の水鏡となる■

特　集

農水産物輸出成功の視線

3 **農産物輸出には日本食文化のすすめ**
夏目 博人
マーケティング重視の戦略的なプロモーションの展開を図るため、効果的な日本食・食文化の海外普及と輸出拡大に資する具体的な方策を提示する

7 **徹底したマーケティングで輸出拡大を**
川原 文香・阿部 あづ希
輸出に取り組む、または、輸出拡大を目指す食品企業に必要なことは何か。輸出に必要となる事項を説明するとともに輸出拡大に向けたヒントを探る

11 **米卸が海外市場で輸出拡大する知恵**
矢野 裕二郎
米卸売業最大手企業の輸出の取り組みから、現地のマーケティングなどクリアしてきた課題を挙げるとともに今後の展望についてリポートする

情報戦略レポート

15 **食品関係企業の約3割が輸出を強化**
5割近くがインバウンド消費に関心
―2015年上半期 食品産業動向調査―

経営紹介

経営紹介
23 **丸彦製菓株式会社／栃木県**
山田 行彦
こだわりの国産原料と手間をかけて作られる高級米菓を主力として、コスト競争にとらわれない、消費者に選ばれる企業を目指す

変革は人にあり
25 **株式会社農樹／京都府**
中津隈 一樹
米の生産から加工、販売までを手掛け、ブランディングなどで価値を高めて、昨年は輸出に挑戦。台湾や香港など海外に販路を開拓した

シリーズ・その他

観天望気
都市農業の見え方　柴田 明夫 …… 2

農と食の邂逅
寿雀株式会社／神奈川県
三橋 真秋
青山 浩子(文)　河野 千年(撮影) …… 19

耳よりな話 169
乳牛のエネルギーバランス　韮澤 圭二郎 …… 22

書　評
阿部 希望 著
『伝統野菜をつくった人々「種子屋」の近代史』
青木 宏高 …… 28

まちづくりむらづくり
水産物ブランド化や都市漁村交流活動
豊かな海を活かした地域マリンビジョン
歯舞漁業協同組合／北海道
平山 明 …… 29

インフォメーション
「アグリフードEXPO大阪2016」の来場者過去最多
情報企画部 …… 32

就農希望者を育成する「とやま農業未来カレッジ」で講義
富山支店 …… 32

交叉点 官民一体の「韓国木材視察・商談ミッション」を開催
熊本支店 …… 32

AFCフォーラム総目次（2015年4月号～2016年3月号） …… 33

みんなの広場・編集後記 …… 37

ご案内
第11回アグリフードEXPO東京2016 …… 38

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。

観天望気

都市農業の見え方

日本農業を取り巻く状況が一層厳しさを増して、今年はＴＰＰ（環太平洋経済連携協定）の批准に加え、ＥＵとの貿易交渉も進められている。こうした中、政府は昨年一一月、日本農業の実態を示す『２０１５年農林業センサス』の概要を発表した。五年に一度の調査で明らかになったのは、日本農業の弱体化が止まらないという現実だ。

一部の農家に農地が集約されたが、農家の廃業が加速度的に進んだ。問題は、耕作放棄地が四二万ヘクタールと過去最大を更新していることだ。日本農業の生産基盤が揺らいでいると言えよう。

政府は、こうした傾向に対してＴＰＰ対策と併せて、守りから攻めの農業に転換し、若い人が夢を持てる農業を行えるように万全の対策を講ずるとしているが、問題はそのための具体的な対策に欠けることだ。この点、新たな動きとして農林水産省は一月三〇日、昨年四月に制定された都市農業振興基本法を受けて基本計画を策定した。これまで、市街化区域の農業振興を積極的に図る思想はなかったのだが、これが大転換する。基本計画では、「都市農業の多様な機能の発揮」という政策課題の実現に向けて、本格的な農業振興施策が講じられることになった。

背景には、日本農業をめぐる内外環境が厳しくなっていく中で、都市農業にも「食料自給率向上の一翼を担う」「都市住民の多様なニーズに応え、地産地消や体験農園、農福連携など農村地域における六次産業化のモデルを数多く先行的に生み出す」といった狙いがある。国土・環境保全や「都市と緑の共生」を目指す都市政策上の評価も加わる。

都市農業では、供給サイドに加えて、需要サイドの対策こそ重要であろう。なによりも、消費者が安全で信頼性の高い国産品を買い支える取り組みや仕組みをつくり、それを行政が支援することだ。とかく安ければ安いほど良いといった風潮が強まる中、この都市農業振興への施策を契機として、消費者には農業への共感と適正価格を見極める力、そしてそれをしっかりと受け入れる覚悟を期待したい。

株式会社資源・食糧問題研究所 代表
柴田 明夫

しばた あきお
1976年東京大学農学部卒業後、丸紅株式会社に入社。2001年に丸紅経済研究所主席研究員、03年副所長、06年所長、10年4月より代表に就任。11年10月より現職。農林水産省「食料・農業・農村政策審議会」食品産業部会委員を歴任。現在、農業農村振興整備部会委員。著書に『食糧争奪』（日本経済新聞出版社）、『食糧クライシス』（エフビー出版）など多数。

二〇代でじゅうぶんに趣味を楽しみましたから もう、遊びは卒業です しっかりとした経営 これが私の理想です

農と食の邂逅

三橋 真秋（ま しゅ）さん

神奈川県伊勢原市
寿雀株式会社 マネージャー

庭先養鶏を始めた祖母から両親が仕事を継ぐ。現在は三万羽を飼養し、生産者自らが卵専門店を経営して一日二万五〇〇〇個を売る。日本人は、ほぼ毎日食べるほど、世界でまれな卵好き。やがて三世代継承の娘への時代へ。

P19：2人の姉を持つ真秋さん。おしゃれな名前は父親の好夫さんが命名　P20：味の決めてはエサ。好夫さん（右）が鶏や卵を常にチェックし、配合割合を微妙に変える（右上）　直売所の開店は午前9時。1時間前から列ができる（右下右）　卵はサイズにより248～324円（10個入り）で販売（右下左）　「卵焼きや目玉焼きなどシンプルな食べ方のほうが、卵の味はよく分かります」と真秋さん（左）

行列をなす卵専門店

行列ができる店は全国津々浦々にあるが、行列のできる卵専門店、しかも生産者が運営する店はそうそうない。一日約二万五〇〇〇個を小さな直売所で売る。平日でも開店一時間前から列をなす人たちの目当ては、寿雀（じゅじゃく）株式会社の「寿雀卵」だ。

住宅が立ち並ぶ伊勢原市は、かつては田んぼとわずかな家畜を飼う複合農家ばかりだった。三橋真秋さん（三五歳）の祖母、弘子さんが庭先で鶏を飼い始め、父親の好夫さん（六三歳）の物心がつく頃には採卵鶏主体の経営になっていた。

好夫さんの代から徐々に羽数を増やし、一九六八年に法人化。「住宅地が近いので、ここでの規模の拡大は難しい。味で勝負することにしました」と、社長の好夫さんは配合飼料に魚粉、海藻、カキ殻などミネラルを加え、おいしい卵づくりを極めた。

地元の商店などに卸す一方、農場に直接買いに来る人に売り始めると、おいしさが口コミで徐々に広まり、やがて対応しきれなくなった。農場から車で五分ほどの道路沿いに直売所を構えたのは九九年。人目につく場所への移転で、さらにお客さんが増え、毎日のように行列ができるようになった。テレビ番組でもたびたび取り上げられ、食べた人がブログで紹介するなどして、さらに口コミで評判が広がっていった。

私もさっそく寿雀卵をいただいたが、黄身の色が鮮やかで、見た目にも強烈なインパクトを受ける。卵かけご飯で食べると卵本来の甘さ、うま味がよく分かる。「うちの卵は卵臭くないとよく言われます」と真秋さん。

好夫さんの三女、真秋さんが入社したのは直売所ができて二年ほどたった頃。短大を卒業した後「特にやりたいこともなく、ぶらぶらしていて、何となく手伝い始めました」。好夫さんから言われた仕事はこなしたが、それ以上のことはせず、どちらかといえば趣味に生活の重心を置いていた。

業務改善で芽生えた責任感

そんな真秋さんに転機が訪れた。入社から五年後、新たに顧問契約した税理士の指導がきっかけだった。伝票の整理に始まり、業務改善についてアドバイスを受け、真秋さんがその担当者になった。法人化したとはいえ、家族経営の名残もあり、「経費の伝票もごっそり箱に入ったままの状態」だった。

真秋さんは、税理士の指導を受けながら従来のやり方を変えていった。以前は時給制だった給料を月給制に移行したことで「給料も少し増えて、やる気になったんです」と言う。また、それまで直売所の売り上げはレジに打ち込むだけだったが、POSシステム（point of sales：商品を販売した時点での情報を管理する経営手法）を導入した。これで真秋さんに気合が入ったという。

例えば、直売所のレジと連動させ、お客さんが集中する時間帯を確認できるようにし、

その時間に合わせてスタッフを増員した。今でこそ卵の運搬は外注しているが、かつては農場から直売所までスタッフが卵を運び、お客さんの注文を受けながら売り場でパックに詰めていた。これでは効率が悪いと、農場内でパック詰めした卵を運び入れ、直売所では販売に集中するようにした。

生産部門ではベテランの従業員のほか、障がい者を雇用している。卵は店頭販売をメインにしながら、地元に限って配達も計画している

さらに、フルタイムだけでしか雇っていなかったスタッフも、お客さんの多い時間帯だけの雇用も始めるなど、データと連動させて仕事を組み立てていった。「工夫した結果が数字となって出てきたので面白くなりました」と真秋さん。気付くと、仕事中心の生活に変わっていた。

「二〇代前半に十分趣味を楽しんだので、もう遊びは卒業です。今、休みは週一回。長く休むと仕事のことを考えてしまうようになりました」。それでも、仕事が好きとは言わない。「自分がいないと会社が回っていかないので」と、あくまでもクールだ。

伊勢原市の農場の飼育羽数は約三万羽。鶏の調達、飼料など農場全体の管理は好夫さん、母親の範子さん（六一歳）と二女の英子さん（四〇歳）が梱包作業を担い、真秋さんは販売管理、経理、人事と幅広い仕事を任されている。仕事ぶりが見込まれ、将来は後継者に、と言われている。「そろそろ生産の方も覚えないといけないんですが」と、苦笑いする。

行列緩和に乗り出す

真秋さんの仕事は家族経営からステップアップした会社を、より法人らしい形態に移行する作業だと感じた。店頭販売が大半を占めるが、わずかながら卸売りもしている。長い付き合いの商店主から「今日は雨で売れ行きが悪そうだから」と事前の注文の量を減らされることがある。だが、真秋さんたちはその商店のために一定量を確保しており、突然の注文変更はリスクになる。

真秋さんは「昔からの付き合いだから」といった慣習にメスを入れ、発注量が読めない場合は店頭で欲しい分だけ買ってもらうようにした。あえて憎まれ役を買って出るのは簡単なことではないはず。「私は悪役なので」と、達観した表情で話すが、家族経営から発展した法人の後継者の誰もが抱える課題にしっかりと向き合う姿が印象に残った。

今、真秋さんには大きなミッションが与えられている。今年計画中の直売所の建て替えと、それに伴う予約方法の充実だ。電話予約はすでに受け付けているが、インターネットや直売所内に設置するタッチパネルで簡単に予約できるシステムの設計だ。

予約制の整備は、長蛇の列を緩和するための措置でもある。中でも、年末の混雑ぶりは相当なもので、お歳暮やおせち料理の伊達巻に使うため、直売所は一年で最も混み合う。敷地内では警備員を増やして交通整理をするが、駐車場に入ろうと並ぶ車列で渋滞が起きることもしばしばだ。年末以外でも一〇〇個単位でまとめ買いして、近所で分ける人もいる。「予約して買ってくれる人が増えれば、行列も少なくなるし、会社も売り上げが安定するんですが…」。将来は店頭販売と予約販売を半々にしたいと考えている。

真秋さんは、経営を任される日が来ても規模を拡大するつもりはない。加工技術を持つ企業との連携はあり得るが、自ら加工に乗り出すつもりもない。「理想は自分がいなくても、きちんと経営が成り立つ会社にすること。そして、いつも買いに来てくださる人が長い行列に並ぶことなく、少しでも買いやすくすることなんです」。多くを語るタイプではないが、仕事に対する真剣さ、責任感の強さは十分伝わってきた。

（青山 浩子／文　河野 千年／撮影）

耳よりな話

乳牛のエネルギーバランス

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
畜産草地研究所 家畜育種繁殖研究領域長
韮澤 圭二郎

乳牛の飼養管理において重要なエネルギーバランスという考え方を紹介したい。

乳牛、特にホルスタイン種は、乳量を増やすことに特化して育種改良がなされ、年間乳量一万キログラムを超す乳牛は珍しくない。乳牛は自らの身体の維持、成長に加え、このような高乳量を生産するために多大なエネルギーを消費する。乳牛は餌を食べることで、そのエネルギーを摂取するが、この摂取エネルギーと乳生産や身体の維持などに消費されるエネルギーの差を、エネルギーバランスという。

これは、乳牛の健康を見る上で重要な指標となる。例えば、乳生産が盛んな泌乳初期は、消費されるエネルギーが増え、摂取エネルギーよりも大きくなるため、乳牛はエネルギー不足の状態になる。この状態を負のエネルギーバランスという。この状態が続くと、ケトーシスと呼ばれる病気の発症や繁殖性の低下、乳房炎などの原因となる。この結果、その後の乳牛の健全性を損なうこととなり、長命連産性を阻害し、生涯生産性の低下を招いてしまうのである。

パーラーで搾乳される乳牛

酪農家にとっては、長命連産性に優れ、生涯生産性の高い乳牛が望ましい。負のエネルギーバランスになりにくい乳牛は、長命連産性に優れている可能性が高い。長命連産性の評価には長時間を要するが、エネルギーバランスの評価は初産や二産目までの短期間でも可能なため、長命連産性を改良するための良い指標となり得る。

しかし、エネルギーバランスは、エネルギーの摂取量および消費量を全て測定して求めるものであるため、多くの個体で測定するのは難しい。そこで、乳成分などからエネルギーバランスを推定する方法の研究が行われている。

これまで、デンマークの乳牛のデータを用いた、乳成分からエネルギーバランスを推定する方法が報告されている。しかし、より精度の高い評価値を得るためには、わが国の乳牛を用いて推定式を新たに作ることが望ましい。幸い、日本には牛群検定という事業があり、乳成分のデータが収集できる。このため、私たち農研機構畜産草地研究所では、牛群検定時に得られるデータからエネルギーバランスを推定する方法を開発することを目指し、全国の公立試験場や大学にご協力いただいて乳牛の飼養試験を開始した。

近い将来、牛群検定時のデータからエネルギーバランスが把握できるようになれば、エネルギーバランスの遺伝的改良が可能となり、生涯生産性に優れた乳牛を酪農家の皆さんに供給できると期待される。

Profile

にらさわ けいじろう
1956年福島県生まれ。79年東北大学農学部卒業。同年農林水産省畜産試験場入省。農業生物資源研究所、家畜改良センター、茨城県畜産センターを経て、2003年から農研機構畜産草地研究所勤務、13年から現職。専門は家禽育種、遺伝資源に関する研究。

『伝統野菜をつくった人々
「種子屋」の近代史』

阿部 希望 著

（農山漁村文化協会・3,500円 税抜）

一次史料をたどる育種の世界

青木 宏高
（NPO法人「良い食材を伝える会」理事）

表紙には彩色を施した細密画を一面に描き、砂川白茎牛蒡、紅丸型廿日大根などと伝統野菜名が記されている。これは種子絵袋で、伝統野菜の由来を調べているときに、東京農業大学の図書館で偶然見つけた。野菜種子を入れる袋だが、販売用に作られた種子入れを、なぜこんなに凝ったものにしているのだろうかと、種子屋のことがずっと気になっていた。

種子屋とは、野菜種子の育種から生産・流通を担う業種である。稲作、養蚕に比して、野菜研究は注目されてこなかった分野である。

江戸時代から現在まで、野菜生産の歴史をたどってみると、種子では明治初期までが「在来種」の時代で、明治中期・後期から昭和三〇年頃までは「固定種」、昭和四〇年以降は「F1品種」に分類される。ちなみに、江戸時代中期に野菜の商品化が始まるが、江戸の人口が一〇〇万人を超え、食料の需要が高まり、江戸近郊の農村が発展する。この時期に生産が忙しく、自家採種の種子生産にまで手が回らなくなり、種子屋が登場する。滝野川人参の種子を販売した記録が残っている。

在来種というのは、遺伝的に雑ぱくで親と同じ形状には育たない場合が多い。作る人や作る土地によって形や大きさに不ぞろいが現れる。そこで在来種から形や大きさのそろった品種を選抜し、固定する技術の確立から生まれたのが固定種である。親品種に同じ特長を持つ固定種であるが、在来種との違いは形質が固定されているか否かである。

そして近代都市が形成され、都市人口が増加すると、野菜需要が拡大し、野菜の商品化が進んで、固定種が作り出された。実は、この役割を担ったのが「種子屋」と呼ばれた人々である。固定種の野菜を「生み、育て、広めた」人々なのである。

先述した「在来種・固定種・F1種」分類の背景には、野菜生産を支える育種技術の進歩が存在している。この育種技術の進歩なしには、日本の野菜生産の発展はなかった。これまで注目されてこなかった種子屋が野菜育種の歴史上で重要な役割を果たしてきたのである。

この本をまとめるために著者の阿部希望さんは、明治から昭和戦前の種子屋が残した経営帳簿、注文葉書、種苗カタログなど貴重な史料をたどって八年間を要したという。史料には、生身の人間の熱意と真面目さがあふれている。野菜種子に関心を持つ人に必読の一冊である。F

読まれてます　三省堂書店農林水産省売店（2016年2月1日～2月29日・税抜）

	タイトル	著者	出版社	定価
1	週刊ダイヤモンド 2016年2月6日号 攻めに転じる大チャンス 儲かる農業		ダイヤモンド社	657円
2	減反廃止 農政大転換の誤解と真実	荒幡 克己/著	日本経済新聞出版社	2,600円
3	週刊エコノミスト 2016年2月2日特大号 農業がヤバい		毎日新聞出版	620円
4	農業と経済 2015年12月臨時増刊号 世界をゆるがす中国農業		昭和堂	1,700円
5	GDP4％の日本農業は自動車産業を超える	窪田 新之助/著	講談社	890円
6	シカ問題を考える バランスを崩した自然の行方	高槻 成紀/著	山と渓谷社	800円
7	農業経済学講義	山崎 亮一/著	日本経済評論社	2,800円
8	農家と農業 お米と野菜の秘密	板垣 啓四郎/監修	実業之日本社	800円
9	漁師と水産業 漁業・養殖・流通の秘密	小松 正之/監修	実業之日本社	800円
10	『ポスト貿易自由化』時代の貿易ルール	林 正徳、弦間 正彦/編著	農林統計出版	4,000円

連載　地域再生への助走

むらづくり まちづくり ドットコム .com

水産物ブランド化や都市漁村交流活動
豊かな海を活かした地域マリンビジョン

北海道根室市
歯舞漁業協同組合 参事　平山 明

地域に有るもの掘り起こそう

「将来も歯舞地区が有益な漁村として存在し続けるためには、この地域に無いものを無理に実施するよりは、あるものを掘り起しながら、その特性を活かそう！」

二〇〇六年に北海道の根室市歯舞地区で設立された「歯舞地区マリンビジョン協議会」は、試行錯誤を経て、翌〇七年、水産業を核とした地域振興方針「地域マリンビジョン」を作りました。

私たちの活動内容をお伝えする前に、まずは歯舞地区がどんなところにあるのか、ということから話しましょう。歯舞地区は、北海道根室市街から東に約一五キロメートルの場所にあり、太平洋とオホーツク海に面した日本本土最東端の根室半島に位置しています。

本土最東端の岬である納沙布岬からは北方領土の島々を望むことができます。

人口は、根室市全体で二万七六二九人ですが、歯舞地区については、根室市の八％程度を占める二二五五人です。地区の基幹産業は漁業です。歯舞漁協の正組合員数は、四四三人、准組合員三一五人の合計七五八人となっています。（二〇一五年一二月末実勢）主力漁業は、組合員の七五％程度が依存する前浜の昆布漁業です。しかし、漁船漁業なども盛んであり、組合員が作る漁業部会は二六部会にも及びます。

さて次に、本題の協議会のことをご紹介します。

二〇〇四年、北海道開発局は、全国への水産物供給基地としての役割を将来にわたり守り育てていくため、北海道水産業・漁港漁村の将来像を示した「北海道マリンビジョン21」を策定しました。道内各地域で、関係者が協議会を組織して「地域マリンビジョン」を策定した上で、さまざまな取り組みを展開し、地域活性化に大いに寄与していこうというものです。「水産業を通じた地域振興」であり元気な地域づくりを地域住民と行政の協働で進めています。

「歯舞地区マリンビジョン協議会」の構成員は、地域住民、商工、観光、農業、地域環境、人材育成、漁協、水産流通、行政機関など四三人と地域の青年会を主体としたワーキング・グループ四〇人の合計で八三人となっています。

協議会での漁協の役割は、実戦部隊という表現が合うでしょうか。構成員になっていただくための説明から、現在のさまざまな企画など、中心となって行っています。

協議会では、大学の教授に支援をいただきながら、地域全体のマリンビジョンについて、何を計画し、どう実践するか、どうすれば地域の活性化につながるのか、少子高齢化が顕著となっている中でどうすれば地域活性化が図られるのかなどを、複数にわたり鋭意検討しました。

さらには、地区の青年から意見を聞く地区懇談会も開催し若い人の考えも取り入れていきました。そして、前述の「地域マリンビジョン」を策定したのです。理念は、「漁村の役割は何か？」を探求

する」です。

取り組みとしては、「歯舞産水産物のブランド化の推進」「漁民が居住することによる多面的な機能の強化」「地域の衛生・環境問題に積極的に取り組み」「都市・漁村交流の活動を推進し歯舞の良さをアピールする」という四つの基本構想をそれぞれの専門部会において具体策を協議・検討して実践しています。

アイデア商品をブランド化

それでは、それぞれの取り組みをご紹介しましょう。

「歯舞産水産物のブランド化の推進」では、漁協所属の一八の漁業部会（現在は二二部会）が連携、専門部会である「歯舞水産物ブランド化推進協議会」を設置し、「一漁業部会一ブランド化運動」を展開しています。この「一漁業部会一ブランド化運動」のきっかけは、もともと漁協で開発、販売をしていた「はぼまい昆布しょうゆ」と「歯舞早煮昆布」にあります。はぼまい昆布しょうゆは、本醸造しょうゆと昆布一番だしを絶妙なバランスでブレンドした商品で、「歯舞早煮昆布」は歯舞群島の本土から一番近い貝殻島で採る本格的に成長する時期前に採取する柔らかい昆布です。漁協では、地域団体商標制度ができた二〇〇六年に、「はぼまい昆布しょうゆ」を地域団体商標として登録をしました。

これに続けとばかりに各漁業部会がブランド化を目指し、この活動をしています。

例えば、さんま部会の「一本立ち歯舞さんま」をご紹介しましょう。一本立ち歯舞さんまは、その名の通り、生の状態でしっぽを持つとピンと立つほどの高鮮度です。朝の市場に一本立ち歯舞さんまを出荷するために、漁業者は、前夜のうちに漁に出ます。そして、釣ったサンマのうち、大型サイズを厳選し、船上で箱詰めします。その他にも流水式紫外線浄化システム（殺菌システム）とマイクロアイス（鮮度維持）を活用し、鮮度保持をしています。

他にも、うに漁業部会の「歯舞日の出うに」（塩水でパックされている）、定置部会の「歯舞しゃけ丸」（厳選秋鮭）、などアイデアあふれる商品が商標の登録を受け、ブランド化されています。ネーミングは、漁業者発案です。鮮度の良さやおいしさなどからチェーン店を持つ居酒屋などへ定着

上：さんま部会の「1本立ち歯舞さんま」
下：歯舞の良さをアピールするさまざまな活動

profile

平山 明　ひらやま あきら

1958年北海道根室市歯舞生まれ。79年に歯舞漁業協同組合に奉職。2002年から8年間は、全道的にメジャーであり、全国販売をしている「はぼまい昆布しょうゆ」の営業担当として全道更には首都圏を中心とした販促活動により事業を推進。10年事業部長、12年、指導部長、信用部長を経て、14年から現職。

「歯舞地区マリンビジョン」

歯舞ブランド確立に向けて多様な取り組みを展開し、水産業はもとより地域経済や社会の活性化を目指す。歯舞水産物のブランド化を通じた漁業振興と納沙布岬観光の振興による地域の活性化に向けて関係者が一体となって、活気のある地域づくりに取り組んでいる。

し徐々に、広がりをみせています。各種イベントにおいて、直接消費者と触れ合うことも、漁業者の士気を上げる要因になっているようです。

また、はぼまい昆布しょうゆを使用しての地域協働も生まれ、根室市内および近隣の水産加工会社数社で、はぼまい昆布しょうゆを使用した「イクラの醤油漬け」等魚卵の加工商品が出されるなど、更には札幌の大手漬物会社からも、このしょうゆを使用した大根やゴボウの漬物が出されるようになり、商品の売れ行きも好調です。

「漁民が居住することによる多面的な機能の強化」は、持続可能な漁業の環境整備を漁民自ら行っています。例えば、昆布漁業において環境改善のための「雑海藻駆除事業」、秋鮭については「稚魚放流」などです。

また、漁民やその家族が講師となる体験型学習として、地元小学生を対象とした沿岸での「地曳き網」体験や水産教育ということで、地元小・中学生を対象とした鮭の稚魚や稚ウニの放流、アサリ貝の移植放流などの実施。高校生に対しては、当漁協女性部による「お魚の出前料理教室」など、食育活動も活発に行っています。

歯舞こんぶ祭りが大人気

「地域の衛生・環境問題に積極的に取り組み」は地域の漁港愛護会や地域住民などと連携して、幅広い地域ぐるみの清掃活動の実施や将来の漁業存続には無くてはならない森林（魚つき林）の植樹活動も、近隣の野山にて毎年実施しています。北方領土の象徴的な樹木である「千島桜」の移植にも取り組んでいます。

「都市・漁村交流の活動を推進し歯舞の良さをアピールする」は、都市・漁村交流を積極的に推進し、この地域の良さをアピールすることが地域の発展に欠かせないと考えることから、春には「歯舞お魚祭り」、夏は「歯舞こんぶ祭り」、秋には「水産祭り」を開催したり、根室市で行われる数々の水産イベントや大阪や札幌の百貨店催事に参加しています。

その中で歯舞こんぶ祭りをご紹介いたしましょう。二〇〇七年から毎年一回、八月下旬に行っているこのお祭りは、女性部、青年部、水産物ブランド化推進協議会、漁業者、市、地域企業などが参加し地域一体となって開催しています。

一四年の第八回目からはアトラクションとして、昆布漁体験を実施しています。漁業者の手ほどきを受けながら、子どもたちが漁船に乗って長い昆布採りに挑戦するものです。子どもたちは、想像以上に重く長い昆布に四苦八苦しながらも力いっぱい昆布を巻き取っていくようです。

ステージでは、歯舞中学生によるヨサコイや獅子神楽保存会による演舞が披露されたりおおにぎわい。また、第一回目から漁協の指導船「はぼまい丸」で納沙布岬周辺を遊覧航行を実施しています。こちらも大変人気で、一度、悪天候で中止せざるを得なくなった時は、残念だという声が多く寄せられたほどです。

飲食コーナーでは昆布そば、たらフライなどが、また炉端コーナーでは、ホタテやイカのゴロ焼きなど、いずれも歯舞の特産物を素材に使った料理が並び大変好評を得ています。毎年工夫を重ねて取り組んでいます。お客さまも増え続けており、昨年の九回目は過去最高の四三〇〇人と多くの方々にご来場いただきました。ありがたいことです。

地域の誇り生む活動に

祭りの他にも、海霧の発生しない一〇月頃から翌年三月位までの中で、北方領土を眼の前で眺望できるクルージングを行っています。納沙布岬途中までの間にラッコやゼニガタアザラシ、運が良ければクジラやイルカ、シャチなどの海洋生物、さらには、数多くの海鳥が観察できるということで、日本のみならず世界各国からも数多くいらしてくださいます。他にも半島海岸域での地びき網、エビかご漁業の体験など取り組みはたくさんあり、全てをご紹介することができないのが残念なほどです。

これらを鋭意実践する中で、今までの取り組みを振り返るとどうすれば地域活性化が図られるのか、常に反省と改善を繰り返してきました。

そして今では、マリンビジョン活動を通して地域の魅力に気づき、今や、それが誇りになってきているのを感じています。まだ、さまざまな課題があり、一進一退を繰り返している状態です。しかし、「マリンビジョン活動」を継続して発展させ、漁村の特性を情報発信しながら、「交流人口の増加」を目指し、四つの専門部会の機能を継続して発揮し、常にビジョンの実現に向けた取り組みを発展・深化し前進するのみと熟考しております。

これらの取り組みを続け私たちが描くビジョンに近づくために「継続は力なり！」の精神で取り組んでいきます。ぜひ、応援してください。

「アグリフードEXPO大阪2016」の来場者過去最多

二月一八～一九日、「アグリフードEXPO大阪2016」を開催しました。大阪での開催が九回目となる今回は、四二九先の農業者および食品製造業者の皆さまにご出展いただきました。来場者は一万五四九〇人、商談引合件数は五〇三三件となり、会場は活発な商談や交流でにぎわいました。

大阪では初めて東日本大震災「復興支援コーナー」を設置し、福島県、茨城県の方々に魅力ある特産物をPRしていただきました。

セミナー会場では、輸出や六次産業化などをテーマに講演が行われ、聴講した出展者との活発な質疑応答が行われました。

農産物・食品の輸出促進のため連携している、独立行政法人日本貿易振興機構（ジェトロ）は、アジアやヨーロッパなど海外一六カ国・地域から日本食材の輸入に関心を持つ一八社のバイヤーを招聘し、輸出商談の機会を設けました。また、海外展開相談コーナーでは、ジェトロ、日本貿易保険および貿易会社をアドバイザーとして招き、出展者の皆さまからの輸出に関するご相談に応じました。

出展者からは「来場者の方が真剣に話を聞いてくれ、非常にやりがいを感じました」、またバイヤーからは「毎回こだわりの食材探しのために重宝している展示会の一つです」「毎年来ていますが、出展者の製品が年々レベルアップしているように感じます」などの声が寄せられました。

次回、第一一回「アグリフードEXPO東京2016」は八月一八～一九日に開催します。募集期間は四月一日～五月三一日です。

詳細については、公式ホームページ（https://www.agri-foodexpo.com/）をご覧ください。

次号で第一〇回のアンケート結果を掲載します。（情報企画部）

出展者は自慢の商品をPRします

就農希望者を育成する「とやま農業未来カレッジ」で講義

一月七日、富山県の農業後継者育成機関「とやま農業未来カレッジ」で、研修生一六人を対象に、富山支店農林水産事業統轄の田村佳隆が講師となり、経営戦略策定プロセスや農業経営計画の策定方法などを解説しました。

講義後、研修生たちは経営管理に必要な項目チェックを通じて、就農後の姿をイメージしていました。また、新規就農における資金制度などについて熱心に質問していました。彼らの真剣な表情からは、富山県農業をけん引する経営者としての自覚がさらに高まったように感じられました。（富山支店）

熱心に講義を聴く研修生たち

●交叉点●

官民一体の「韓国木材視察・商談ミッション」を開催

二月二～四日、九州経済連合会との共催で韓国の木材関係施設などを視察。製材業者や九州の自治体二人にご参加いただきました。

初日は釜山の日系木材物流施設を視察し、日本産木材の輸出の流通工程を学びました。翌日はソウルの木材輸入業者を訪問し、木材加工施設を視察後、日本産木材の普及の可能性について意見交換しました。参加者からは「現地を視察し、木材輸入業者との意見交換で、輸出の糸口が見えてきました」などの感想が寄せられました。（熊本支店）

国産材輸出に光が差した韓国視察

AFCフォーラム　総目次　2015年4月（第776号）～2016年3月号（第787号）

2015年4月号（第776号）

＊バックナンバーはホームページ（www.jfc.go.jp/n/findings/publish.html）からご覧いただけます。

特　集

農業の人材を育む力とは

人材育成に生かすナレッジマネジメント　伊藤 房雄
農業の経営託せる人材の育成を急げ　木村 伸男
多様な人材取り込み異分野と連携を　木之内 均

情報戦略レポート

単独、夫婦のみ世帯が増加
食の志向は「健康」「経済性」強まる
―消費者動向調査の世帯分類別分析―

経営紹介

■経営紹介　特別企画「アグリフードEXPO東京2015」
株式会社坂利製麺所／奈良県
■変革は人にあり　大地 勝史　センナリ株式会社／広島県

シリーズ・その他

■観天望気　農業女子の情報発信力　伊藤 淳子
■農と食の邂逅　古代豚白石農場／埼玉県　白石 光江　青山 浩子
■耳よりな話　耕作放棄地放牧への期待　山本 嘉人
■フォーラムエッセイ　全ては畑から　神保 佳永
■書　評　日本農業新聞取材班 著『鳥獣害ゼロへ！一集落は私たちが守るッ』　青木 宏高
■まちづくりむらづくり　OH!! 鰐 元気隊／青森県　相馬 康穫
■その他　AFCフォーラム総目次（2014年4月号～2015年3月号）
みんなの広場・編集後記
第10回アグリフードEXPO東京2015

2015年5月号（第777号）

特　集

10年先の水田農業を描く

水田農業コストダウンの可能性と課題　秋山 満
水田畑輪作体系の構築に活路を見いだす　梅本 雅
常識にとらわれない自己変革で変化に対応　横田 修一

情報戦略レポート

規模拡大・多角化の発展段階に応じた
経営資源の活用が高収益の鍵
―稲作経営における収益性分析調査―

経営紹介

■経営紹介　特別企画「アグリフードEXPO東京2015」
株式会社ノベルズ／北海道
■変革は人にあり　髙井 眞佐実　株式会社赤城深山ファーム／群馬県

シリーズ・その他

■観天望気　連携を支える「プロの脇役」たち　大浦 久宜
■農と食の邂逅　ひふみ養蜂園株式会社／千葉県　尾形 玲子　青山 浩子
■耳よりな話　母乳による免疫　松原 豊
■フォーラムエッセイ　農業に笑いを　三遊亭 兼好
■まちづくりむらづくり　LODEC Japan／長野県　たつみ かずき
■書　評　池澤 夏樹 訳『古事記』　宇根 豊
■インフォメーション　エリア限定商談会で販路開拓を支援　日本プロ農業総合支援機構
第10回「アグリフードEXPO東京2015」を開催します　情報企画部
風評被害克服に向け個別商談会を実施　福島支店
公庫資金への理解を深める研修会を開催　前橋支店
再建遂げた企業のリーダーが漁業関係者の会で講演　長崎支店
「やまぐち六次産業化・農商工連携研修会」を開催　山口支店
「農の雇用事業」で人材育成・経営発展へ　農林水産省
■交叉点　アジアの農業金融関係者が奈良県の先進農業を視察　奈良支店・情報企画部
■その他　みんなの広場・編集後記
第10回アグリフードEXPO東京2015

2015年6月号（第778号）

特　集

農村の人口減少化を問う

「田園回帰」と地方創生―農山村におけるその意義―　小田切 徳美
農業の活性化で農村の人口減少に歯止め　増田 寛也
「消滅」回避に挑戦する過疎・高齢化の町　岸上 光克

情報戦略レポート

食品産業景況は先行き改善見通し
HACCP導入に資金負担が問題
―2014年下半期 食品産業動向調査―

経営紹介

■経営紹介　特別企画「アグリフードEXPO東京2015」
株式会社雲仙きのこ本舗／長崎県
■変革は人にあり　手塚 一利　有限会社山梨フルーツライン／山梨県

シリーズ・その他

■観天望気　くいぢから　辰己 佳寿子
■農と食の邂逅　稲作経営・有限会社しらかわファーム／青森県　白川 幸枝　青山 浩子
■フォーラムエッセイ　オーガニックコットンに魅せられて　杉田 かおる
■耳よりな話　イチゴ生産を変えた電照促成栽培　吉岡 宏
■まちづくりむらづくり　特定非営利活動法人 学生人材バンク／鳥取県　中川 玄洋
■書　評　内山 節 著『自然と人間の哲学』　村田 泰夫
■交叉点　農業者の海外進出（現地生産）～台湾へ進出した花き生産者の挑戦～　情報企画部
■インフォメーション　魅力ある経営ビジョンを探るセミナー・交流会を実施　横浜支店
台湾市場を参考にした講演会フードネット in 北海道を開催
札幌支店、帯広支店、北見支店
HACCP支援法に基づく計画認定業務の勉強会を開催　融資企画部
アグリビジネス支援に向けたセミナー&交流会を開催　岡山支店
■その他　新規就農を希望される方へ
みんなの広場・編集後記
第10回アグリフードEXPO東京2015

2015年7月号（第779号）

特　集

「農と食」をつなぐ未来

農産商品の開発に必要な多視点の条件　平岡 豊
金融機関に問われる農業経営のサポート　細川 拡厚

特別座談会

1×2×3=6次産業化の未来
「農と食」をつなぐ使命

情報戦略レポート

農業景況DI 昨年は大幅悪化
今後の経営方針は規模拡大が４割超
―2014年下半期 農業景況調査―

経営紹介

■経営紹介　特別企画「アグリフードEXPO東京2015」
有限会社ハーレイ牧場／栃木県
■変革は人にあり　秋竹 新吾　株式会社早和果樹園／和歌山県

シリーズ・その他

■観天望気　「うまいッ!」食材の物語　武内 陶子
■フォーラムエッセイ　「食と笑顔」を届ける　相澤 りょう
■主張・多論百出　野口種苗研究所　野口 勲
■農と食の邂逅　農業生産法人有限会社佐野ファーム／静岡県　佐野 敦子　青山 浩子
■耳よりな話　酪農関連の碑めぐり（その9）　加茂 幹男
■書　評　上原 浩 著『純米酒 匠の技と伝統』　青木 宏高
■インフォメーション　農業ビジネスの動向について大学生に講義　近畿地区統轄
創造力あふれる高校生のビジネスプランを大募集　グランプリ運営事務局
「技術の窓」で農業の最新技術情報を提供しています!
■その他　「アグリフードEXPO東京」10年の歩み
新規就農を希望される方へ
みんなの広場・編集後記
第10回アグリフードEXPO東京2015

2015年8月号（第780号）

特　集

「農」のリーダー像に迫る

いま農業現場に求めるリーダーシップ　小野 善生
集落営農組織の法人化が地域を変えた　吉弘 昌昭
自由化時代を読み成長を続ける経営手腕　境野 徳夫

情報戦略レポート

国産品への支持傾向強まる
食品購入判断は、価格や国産を重視
―2014年度下半期 消費者動向調査―

経営紹介

■経営紹介　特別企画「アグリフードEXPO東京2015」
スギ製菓株式会社／愛知県
■変革は人にあり　河二 敏雄　有限会社かわに／石川県

シリーズ・その他

■観天望気　『スマート・テロワール』のすすめ　松尾 雅彦
■農と食の邂逅　愛媛エフ・エー・ゼット株式会社／愛媛県　玉井 奈緒子　青山 浩子
■フォーラムエッセイ　野菜いっぱい生活　酒井 千佳
■主張・多論百出　NPO法人ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会　武藤 一夫
■耳よりな話　刃物を使わず皮むきをする加工法　野口 真己
■まちづくりむらづくり　京都府相楽郡和束町　堀 忠雄
■書　評　三輪 節生 著『食卓からアサリが消える日』　宇根 豊
■インフォメーション　戦略的経営で稼げる農業へ農業法人向けセミナー開催　熊本支店
農業者と金融機関との関係発展を目指した研究会を開催　鹿児島支店
北海道新幹線開業を見据えた商談会を開催　青森支店
農産物のブランド構築に公的支援制度活用の講演　甲府支店
■その他　新規就農を希望される方へ
みんなの広場・編集後記
第10回アグリフードEXPO東京2015

2015年9月号（第781号）

特　集

水産物安定供給への布石

どうする日本の漁業資源管理の在り方　濱田 武士
強い漁業経営はいかにしてつくるか　柳川 延之
流通から見る水産業界これからの時代　石井 元

情報戦略レポート

収量・単価の向上により
10a当たり売上高1,000万円を目標に
―大規模施設トマト栽培（太陽光利用型植物工場）の収益性分析調査―
40歳以下、非農家出身の
青年の就農を中心に融資で後押し
―青年等就農資金融資実績の分析結果―

経営紹介

■経営紹介　株式会社未来農業計画／長野県
■変革は人にあり　矢野 仁　株式会社和農産／山形県

シリーズ・その他

■観天望気　魚食文化を守る　服部 幸應
■農と食の邂逅　本間農園／佐賀県　本間 綾　青山 浩子
■フォーラムエッセイ　魚熱　麻木 久仁子
■耳よりな話　人工甘味料の不思議なブレンド効果　河合 崇行
■主張・多論百出　八面六臂株式会社　松田 雅也
■まちづくりむらづくり　群馬県利根郡みなかみ町　河合 進
■書　評　山下 一仁 著『日本農業は世界に勝てる』　村田 泰夫
■インフォメーション　「食品安全に関する有害微生物の実態調査の結果集」を公表しました
農林水産省 消費・安全局 消費・安全政策課
経営のレベルアップを目指す農業者へ出張講義を実施　仙台支店
岡山市内で中国四国ブロックの農林水産交流会を開催　中国四国地区統轄
「アグリフードEXPO輝く経営大賞」受賞者決定　情報企画部
■その他　みんなの広場・編集後記
第9回アグリフードEXPO大阪2016

2015年10月号（第782号）

特　集

農業インフラを思索する

担い手育成も観点にインフラ整備と保全　荘林 幹太郎
水田の大区画化と汎用化による農業活力　瀧川 拓哉
独自の基盤整備で独自の経営を展開　田中 正保

第10回「アグリフードEXPO東京2015」セミナー

外食産業の価値創造戦略 生産者と取り組む新たなメニュー創り　矢崎 精二
日本食輸出先としての香港市場 海外マーケティングにおける4つの提案　伊東 正裕

経営紹介

■経営紹介　銚子市漁業協同組合／千葉県
■変革は人にあり　林 博文　特定非営利活動法人ピアファーム／福井県

シリーズ・その他

■観天望気　生産性向上の意味　荒幡 克己
■農と食の邂逅　有限会社アグリおき／島根県　遠藤 亜希　遠藤 理佳　青山 浩子
■耳よりな話　イチゴ栽培の救世主「高設栽培」　吉岡 宏
■フォーラムエッセイ　伝え残したい行事菓子　中山 圭子
■まちづくりむらづくり　NPO法人きらり水源村／熊本県　宮原 美佐子
■書　評　香坂 玲・冨吉 満之 共著『伝統野菜の今―地域の取り組み、地理的表示の保護と遺伝資源』　青木 宏高
■主張・多論百出　銀座農園株式会社　飯村 一樹
■インフォメーション　第9回「アグリフードEXPO大阪2016」の出展者を募集しています　情報企画部
第10回EXPO東京は出展者数、来場者数ともに過去最多　情報企画部
群馬県内の若手農業者が参加するワークショップを開催　前橋支店
農業経営アドバイザーの連携強化を図る連絡会を開催　盛岡支店
■その他　みんなの広場・編集後記
第9回アグリフードEXPO大阪2016

2015年11月号（第783号）

特　集

有能者来たれ! 農業で働く

就農者の確保には必要な人材を明示　岩佐 宏明
働いてみたいと思える職場をつくる　熊本 伊織
雇用型農業経営に求められる労務管理　入来院 重宏

特別企画

平成27年度アグリフードEXPO輝く経営大賞（東日本エリア）
～駆け上がる地域農業の担い手たち～
有限会社 古代米浦部農園／群馬県

EXPO-TEN 深掘りレポート
提案する。六次産業化成功への多視点考察　平岡 豊

経営紹介

■経営紹介　マルミツアグリ株式会社／熊本県
■変革は人にあり　柏木 清　株式会社柏木牧場／神奈川県

シリーズ・その他

■観天望気　経営改善に向けて　安達 長俊
■農と食の邂逅　夕日ヶ丘レストラン善生／北海道　善生 さおり　青山 浩子
■耳よりな話　酪農関連の碑めぐり（その10）　加茂 幹男
■書　評　山下 祐介 著『地方消滅の罠』　宇根 豊
■まちづくりむらづくり　粟田川流域農地・水・環境を守る会／広島県　藤本 勲
■インフォメーション　山形庄内の特産品の輸出で地方創生をサポート　山形支店
地域リーダーとなる担い手を育てる農業大学校で講義実施　帯広支店
商品開発ポイントや六次産業化の事例紹介する懇談会開催　高知支店
若者の発想や想像力を養うプラン作成をサポート　広島支店
■その他　みんなの広場・編集後記
第9回アグリフードEXPO大阪2016

2015年12月号（第784号）

特　集

インバウンド、農への条件

農村に起こすインバウンドの動きを追って　本誌編集部「インバウンド」特別取材班
アイデアで外国人観光客誘致の地域力　浪川 桂一郎
外国人観光客もターゲットに観光立県戦略　五田 嘉博

特別企画

平成27年度アグリフードEXPO輝く経営大賞（西日本エリア）
～駆け上がる地域農業の担い手たち～
有限会社 かわに／石川県

経営紹介

■経営紹介　有限会社久在屋／京都府
■変革は人にあり　大西 隆　農事組合法人セントラルローズナーセリー／岐阜県

シリーズ・その他

■観天望気　農村インバウンド観光の基本　大江 靖雄
■農と食の邂逅　有限会社まるせい果樹園／福島県　佐藤 ゆきえ　青山 浩子
■フォーラムエッセイ　運命の出会い　魚住 りえ
■主張・多論百出　NPO法人いすみライフスタイル研究所 ちばの野菜伝道師　髙原 和江
■耳よりな話　肥料資源としての家畜ふん堆肥　加藤 直人
■まちづくりむらづくり　NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会／大分県　宮田 静一
■書　評　弘兼 憲史 著『島耕作の農業論』　村田 泰夫
■インフォメーション　農業の担い手が県内最大農業法人を視察　秋田支店
千葉の農業の「今」をラジオで紹介　千葉支店
20周年記念の交流会と記念式典を開催　九州地区統轄
大阪市内で食品産業の企業交流会を開催　近畿地区統轄
■その他　新規就農を希望される方へ
みんなの広場・編集後記
第9回アグリフードEXPO大阪2016

総目次

2016年1月号（第785号）

特　集

フードマーケット新潮流

国産野菜で中食産業の新潮流は可能か　大隅 和昭
調理改善が進む介護食品市場に新潮流　齊木 乃里子
食品供給元が「安全」で選択される　加藤 光夫

情報戦略レポート

農業景況DI上半期は多くの業種で大幅改善
5業種でプラスに転化
―2015年上半期 農業景況調査―

経営紹介

■経営紹介　農事組合法人たねっこ／秋田県
■変革は人にあり　小林 紀彦　有限会社小林牧場／北海道

シリーズ・その他

■観天望気　米国でも、食はファストからスローへ　小川 孔輔
■主張・多論百出　特定非営利活動法人日本ジビエ振興協議会　小谷 浩治
■農と食の邂逅　株式会社善太／兵庫県　清水 くみ子　青山 浩子
■フォーラムエッセイ　誕生日に娘が欲しがったもの　田中 章義
■耳よりな話　牛疫と動物衛生研究所　佐藤 真澄
■まちづくりむらづくり　宮崎県東諸県郡綾町　前田 穣
■書　評　盛田 淳夫 著『ゆめのちから―食の未来を変えるパン』　青木 宏高
■トレンド・アイ　国産食肉の活路を開く ― HACCPの力 ― 日本畜産興業株式会社／埼玉県
■インフォメーション　三事業合同でかがわビジネス交流会を開催　高松支店
三事業連携の島根県産品業者の交流会を開催　松江支店
稲作経営に係る意見交換会を開催　青森支店
子ども絵画展2015の農林水産事業本部長賞を決定　情報企画部
■その他　衛生・品質管理向上をお考えの食品製造・加工業者の皆さまへ
みんなの広場・編集後記
第9回アグリフードEXPO大阪2016

2016年2月号（第786号）

特　集

森林・林業の新時代が来る

持続可能な林業と国産材利用の推進　宇野 聡夫
自伐型林業が新しい担い手をつくる　興梠 克久
林業経営の担い手は緑の雇用策から　奥山 洋一郎

情報戦略レポート

安全、おいしさ、見た目などの
品質面で国産支持
―2015年度上半期 消費者動向調査―

経営紹介

■経営紹介　株式会社御子神畜産／千葉県
■変革は人にあり　北岡 幸一　丸和林業株式会社／高知県

シリーズ・その他

■観天望気　持続可能な森林・林業へ　酒井 秀夫
■農と食の邂逅　大田原市森林組合／栃木県　齋藤 朱里　青山 浩子
■フォーラムエッセイ　パーティーの主役たち　西口 彰子
■主張・多論百出　日本産・原木乾しいたけをすすめる会　小川 武廣
■耳よりな話　画期的な閉鎖型苗生産システム　吉岡 宏
■まちづくりむらづくり　豊森なりわい塾／愛知県　中川 恵子
■書　評　山下 惣一 著『小農救国論』　宇根 豊
■インフォメーション　名古屋市内で東海ブロックの交流会を開催　東海北陸地区統轄
マイナンバーをテーマに三事業合同交流会を開催　水戸支店
「広島発！ 企業の街コン」を開催　広島支店
近畿管内の林業関係者による友の会を開催　京都支店
■その他　衛生・品質管理向上をお考えの食品製造・加工業者の皆さまへ
みんなの広場・編集後記
第９回アグリフードEXPO大阪2016

2016年3月号（第787号）

特　集

3・11大震災5年後。飛躍へ

地域の特性を制約条件に農業が新展開　伊藤 房雄
確かな検証から考える漁業復興の方策　廣吉 勝治
現地ルポ 原発被害を乗り越える農業立県　村田 泰夫

特別座談会

座談会 特集インサイドストーリー
3.11。茫然自失の瞬間から
復興再生の来る日見つめて

情報戦略レポート

経営再開や復旧・復興が本格化
震災からの復興を今後も全力で支援

経営紹介

■経営紹介　株式会社大分サンヨーフーズ／大分県
■変革は人にあり　曽根原 久司　NPO法人えがおつなげて／山梨県

シリーズ・その他

■観天望気　真の「地方創生」に求められること　片山 善博
■農と食の邂逅　株式会社やさいの樹／静岡県　塚本 佳子　秋岡 榮子
■耳よりな話　酪農関連の碑めぐり（その11）　加茂 幹男
■書　評　窪田 新之助 著『GDP４％の日本農業は自動車産業を超える』　村田 泰夫
■まちづくりむらづくり　NPO法人やまぐち里山環境プロジェクト／山口県　嘉村 則男
■インフォメーション　「農業経営支援セミナー in 新潟」を開催　新潟支店
農産物販売戦略を学ぶ交流会を開催　帯広支店
マッチングも実現した交流会を開催　宇都宮支店
宮城県内の稲作農家を対象とした勉強会を開催　仙台支店
■交叉点　特別リポート 米国養豚業の競争力を探る～アイオワ州訪問記～　千葉支店
■その他　みんなの広場・編集後記
第11回アグリフードEXPO東京2016

みんなの広場

♠『AFCフォーラム』二月号「森林・林業の新時代が来る」のタイトルを見た瞬間、胸が熱くなりました。

二月はTPPの署名式も開催され、いよいよ農政新時代の幕開けだと思います。そのような中、森林・林業においても新時代が期待されています。

私の住んでいる町は小さな町ですが、現在、木質バイオマス発電施設が建設中で、自伐林家の方々は関心を寄せています。また、今後は森林環境税を活用した林業にも注目が集まることと思われます。

私は自伐林家でも、森林組合員でもありませんが、映画「WOOD JOB！～神去なあなあ日常～」を見て以来、林業に興味や関心を持つようになりました。些細なことをきっかけにして、さまざまなことに関心を持つ姿勢が大切だと思います。

（三重県多気郡多気町　三井 諭）

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただくことがあります。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

［郵送およびFAX先］
〒一〇〇-〇〇〇四
東京都千代田区大手町一-九-四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫
農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX　〇三-三一七〇-一三五〇

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

①日本公庫の独自調査（農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など）結果
②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
④日本公庫が発行する『AFCフォーラム』『アグリ・フードサポート』のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ（http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html）にアクセスしてご登録ください。

（情報企画部）

編集後記

農林水産物の輸出金額増加は三年連続で、農産物、林産物、水産物それぞれ増加していることが特徴、まさにジャパンブランドが注目されています。輸出に当たって文化や検疫、制度などの違いに対策を打つことは簡単ではありませんが、多様性に対応するその努力は国内のマーケット攻略にも必ず役に立つことでしょう。（嶋貫）

皆さんは早朝から卵を買うために並びますか？「農と食の邂逅」の寿雀卵を買う行列を見てください。どれだけおいしい卵なのかと、卵好きの私は興味をそそられます。お客さまが少しでも卵を買いやすいようにと、その行列解消に取り組む真秋さん。自分がいなくても経営が成り立つ会社が理想とクールに語る寿雀株式会社三代目です。（小形）

川原さん、阿部さんが米国、中国、タイ、英国への米、トマト、ブドウの輸出を例に挙げ市場性を見極めることの大切さを説かれています。記事を読んで、考え方や評価は国によりずいぶん違うことを理解しました。中でもマスカットは、その名称自体が通じない、または別のものをイメージするということにびっくりでした。（城間）

三三ページから「総目次」を掲載しています。この部分の編集作業を行うと、ご寄稿いただいた執筆者の方々や実際に会ってお話を伺った方々とのやり取りを思い出します。短い期間で、多くの方々にご協力いただき無事に発行できたことを感謝申し上げます。これからも農林漁業の経営に役立つ情報をお届けしてまいります。（林田）

AFC Forum フォーラム

■編集
大本 浩一郎　嶋貫 伸二　清村 真仁
飯田 晋平　小形 正枝　城間 綾子
林田 せりか

■編集協力
青木 宏高　牧野 義司

■発行
（株）日本政策金融公庫　農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail　anjoho@jfc.go.jp
ホームページ　http://www.jfc.go.jp/

■印刷　凸版印刷株式会社

■販売
（一財）農林統計協会
〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-9-13
目黒・炭やビル
Tel. 03(3492)2987
Fax. 03(3492)2942
E-mail　publish@aafs.or.jp
ホームページ　http://www.aafs.or.jp/

■定価　514円（税込）

ご意見、ご提案をお待ちしております。
巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり
農と食をつなぎます。
第11回 アグリフード EXPO 東京 2016
プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会
日時
8月18日(木)/19日(金)
10:00~17:00 10:00~16:00
主催
JFC 日本政策金融公庫
会場
東京ビッグサイト 東4ホール
FOOD ACTION NIPPON
食べて応援しよう!